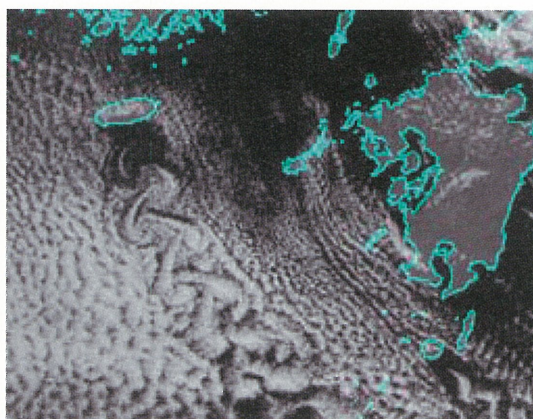
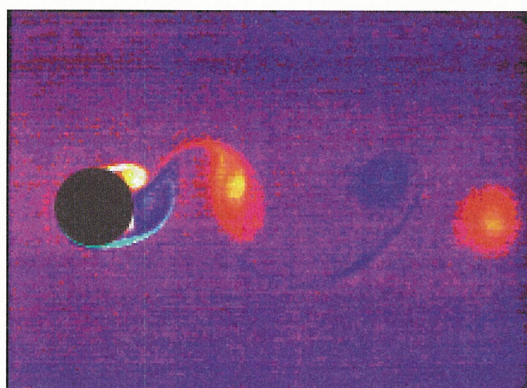


観覧ニュース

97号

2005.10



蟻とキリギリス

黒澤麻美

二十歳になった年に、英語のテキストとして一冊の短編集に出会った。W.S.モーム（1874-1965）の'Cosmopolitans'である。今日に到るまで最も心に残った本の一つなのだが、特にその中の一篇を初めて鑑賞した際、私は大幅に動揺してしまった。

その作品名は「蟻ときりぎりす」といい、誰にもおなじみの寓話が冒頭で紹介され、語り手（モーム作品は一人称での語りが特徴）が親キリギリス派だと宣言して、物語が始まる。極端に対照的なジョージとトムという一歳違いの兄弟がいる。兄のジョージは「蟻」。正直で実直な働き者の弁護士で、妻と四人の娘たちの良き夫・父であり、堅実に貯蓄をし、定年後の悠々自適生活を唯一の楽しみにしている。一方のトムは、良い家柄の出身で一度はビジネス界に入り、妻と二子があったにもかかわらず、突然、仕事も家庭も放棄して放蕩三昧に耽りだした「きりぎりす」である。天賦の魅力的で人を飽きさせない振る舞いを武器に、友人から借金をしながら高い生活水準は落とさず、兄からは詐欺や脅迫で繰り返し金を巻き上げているような人間なのだ。トムは46歳にして30代前半に見えるとはいえ、50歳にもなれば流石に世間にも冷たくされ、悲惨な晩年を迎えるだろう、とジョージは期待していた。（ジョージは還暦に見える老け込みかたである。）ところがトムは母子ほど年上の裕福な女性と結婚し、相続で莫大な財を得る。これをジョージから聞いた語り手は椅子から転げ落ちそうになるほどに笑う、というのが幕切れである。

若かった私は打ちのめされた。こういうケースが現実にあることを知らないほどにナイーブだったわけではないが、あくまで例外として紹介されて欲しい・すべきもの、と考えていたのだ。私は典型的な「蟻」タイプであったので、笑い転げた「語り手」のことが絶対に許せなかった。さらにはこのような「誠実・勤勉な人間は馬鹿をみる」と

訴えんばかりの話を、授業で読まれたことにも幾分腹が立った。

けれども、長く人間をやっているうちに、語り手の態度の「正しさ」を悟るようになった。正しさというよりは健全性なりクールさとでも言った方がよいかも知れない。寓話のように、働き者が褒美を得、怠け者が悲惨な目に遭うという状況は、必ずしも現実と合致しない。渾身の努力が水泡に帰すことや、ずるい人間にしてやられるようなことが、蟻の身には降りかかってくる。「相手」の非を追及できるようなことならまだしも、反撃の余地がない状況に陥ることもありうるのだ。

人が本当の意味で成熟し、より人生を楽しむには、世の中の矛盾というものに対する態度が深く関係してくる。「矛盾」や「不公平」を受け入れ、さらにはたとえ自分に不利益なことであろうとも、そこに「滑稽さ」を見出し、自分を笑わせ楽しませる材料にしてしまえる力を身につければ、余計な苦悩に身をやつすことを避けられ、人生の本質に近づけるのではなかろうか。第三者のように、極端に言えば「神様」のように高いところから自分を客観視し、時には笑い、時には愛おしく思うということである。本当の強さを身につけるとか、「大人になる」ということは、このような態度を体得することではなかろうか。精神の健康にも望ましいことであろう。実際、モームの作品は一般に人類の矛盾、人生の不合理をつく。キリギリス派を宣言し、実際に奔放に生きた人物である点で、私はモームに倣う気は毛頭ない。たとえ損をし続けても、蟻人生を生きる覚悟がある。しかし、彼の作品が教えてくれる「教訓」は感謝を持って受け入れたい。これも矛盾であり、矛盾を矛盾として抱え込めるようになった点で、自分が大学時代よりは成長したのだと信じたい。

（基礎教育センター・英語）

「八月」

戦争体験者たちの高齢化や「語り部」たちが亡くなっていく状況の中で戦争の風化が危惧されている。テレビ・新聞などメディアが提起していくことが重要な役割であるという論調がある。体験していない「戦争」というものが実感として捉えにくいというのも正直なところではある。教養図書館ではこの夏、戦争文学他、関連する図書を収書しているのでぜひ、利用していただきたい。

以下は戦争を記述した夏の模様である。8月は広島・長崎からの発信や「終戦記念日」を中心とした記事が際だっていたが、毎日新聞の戦争・原爆関連の取材力に眼を惹かれた。「戦後60年広島・長崎」「父は原爆の子」「5歳の記憶：あんちゃんを捜して」などと共に「戦後60年夏あゝ場所に行きたい」(8/8～8/18)は出色であった。8人の記者が名作の舞台を訪ね現場に立つことで見えてきたもの、作品の背景を描くルポルタージュである。読んだ方もいるかもしれないが紹介したい。

林京子著『祭りの場』吉田満著『戦艦大和ノ最期』開高健著『日本三文オペラ』井出孫六著『終わりのなき旅』太宰治著『トカトントン』古井由吉著『忿翁』永井荷風著『断腸亭日乗』三島由紀夫著『金閣寺』の8つの作品である。それぞれが独立して完結していたものが戦争というテーマで収斂された時に線となり面となり、より立体的に脈絡をもつ。「小説からは個別の体験を超え、文学でなければ表現し得ない恐怖の体感が確かに伝わってくる」と記者は言う。「被害者の立場で悲惨さを強調するだけでは風化する」とは古井由吉の言葉である。

学徒出陣の体験をもつ吉田満は、戦中派としての戦争体験を様々な作品に昇華させているが、代表作は『戦艦大和ノ最期』である。吉田は、著作「大和」が当時は戦争肯定文学と断定する世評が濃

厚であったことを『戦中派の死生観』（文芸春秋）に記している。また、『散華の世代から』（講談社）では戦争文学について「戦争の悲劇性を強調した記録」として「みずからの体験した戦争の真実を正直に再現させようと試みた」「日本文学には、まだ多くの可能性が約束されている」と文学作品に結晶することへの期待を記している。日銀のサラリーマンでもあった吉田は残念ながら1979年に56歳で亡くなっている。

『祭りの場』は長崎で14歳の時に被爆した林京子が30年後に小説として発表したことで有名な作品（芥川賞）であるが、この夏出版された『林京子全集』第1巻に収載された。その後も被爆を軸にした作品を書き続けているが、最新作は短編集『希望』である。井出孫六著『終わりのなき旅』は中国残留孤児の肉親探しを機に満州開拓を描いた作品である。記者は県内で開拓民の最も多かったという長野県泰阜村を訪ねる。「これほど村を語るものはないから…」と碑文の前に佇み紹介する。ルポは「638人の名を刻む墓碑はまだ終わらない満州開拓民の戦後を教えている」と結ぶ。（あの場所に行きたい8/14）

8月半ば、4回連続のNHKスペシャル「アウシュビッツ」（BBC制作）を最後まで見た方はおられるだろうか。強制収容所は図面を基にCGで復元されたそうであるがその臨場感に鳥肌のたつものがあつた。

日本では、「戦後60年」の節目の夏と言うが60年を経た今、「原爆」も「アウシュビッツ」も「残留孤児」もその傷が癒えることはない。終戦処理と聞くが何も「終ってはいない」ことに思い到る。本棚の片隅に追いやられていた本を取り出ししばらくと読み始めた。果てしなく永遠へと続く夏、暑くて長い八月であった。（教養図書館 潮田万弓）

お知らせ

2階の書架にあった500（工学）600（産業）700（芸術・スポーツ）部門が地下に排架されています。また、美術全集や大型本も別置されています。

カルマン渦列

古川 裕之

上段の絵画は、オランダの画家フィンセント・ファン・ゴッホ（1853-1890）の代表作で、死の前年の1889年に描かれた『星月夜』である。有名な絵画であり、ご覧になった読者の方々も多いのではと思われる。現在はニューヨーク近代美術館に所蔵されており、同館の絵画コレクションの中でも、特に広い人気をあつめていると聞く。ゴッホについては興味の尽きないところだが、美術に対して私はあまりにも無知でセンスもない。そこで今回は、物理屋の立場から、絵画に描かれているパターンについて紹介させていただく。そのパターンとは、『星月夜』の空に描かれている渦巻く雲の列のことである。

中段の図は、円柱を過ぎる流れを流体の支配方程式を直接数値計算することによって得たものである。左から右に向かう速さ一定の流れの中に、円柱が置かれている。その円柱を過ぎる流れを断面で見たものである。例えば、電線のような柱状物体に少し強い風があたっている状況を想像してもらえばいい。このように適当な速さの流れの中に柱状物体を流れと直角におくと、物体の背後に規則正しく並んだ美しい2列の渦がつくられる。一樣流中に置かれた物体の後方では、その物体の影響によって流れに乱れが生じる。この物体後方に生じる乱れた領域を後流と呼ぶが、今回示した渦列は後流の代表的なパターンの1つとして知られている。

図中の色は渦度を表わしている。この渦度は、その位置にある流体粒子の自転角速度に比例する量として定義される。この図では、赤く見える場所は時計まわりの回転を、青い領域は反時計まわりの回転を示している。厳密ではないが、色の濃い部分が「乱れ」が強いと思ってもよい。流れが円柱にあたると、円柱の下流側に一対の渦が上下対称にできる。渦対の領域はしだいに長さを増すが、上下方向に振動し始め、振動が激しくなると、渦対の上下対称性が破れる。そして、成長した渦対は後方に流されるにつれ大きな渦の塊となる。その渦の塊が反対向きの渦領域との相互作用によって交互に後方へ放出される。放出された渦領域は、後流中で規則的に配置する。この平行渦列は1つの渦列と同様、外部攪乱に対して一般に安定ではない。ただ例外的に、互い違いの平行渦列で、1つの列の渦と渦の間隔が2つの列の間隔の約3倍という関係が成り立つ場合には、渦列は中立安定である。この平行渦列については、Bénard

（1908）が最初に実験的研究をおこなったが、不安定性の考察を含む理論的研究は Kármán（カルマン、1911）によってなされたので、カルマン渦列と呼ばれる。

川の溪流を頭の中に思い描いてもらいたい。急流にある岩礁付近では川の流れが乱され、その下流には所々で渦巻きが発生している。空気も流体力学的に水と同じような性質を持ち、このような渦巻きは、実は空気中でも発生している。カルマン渦列が作り出す周期的な空気流の変動は、風が作り出す音として、電線のうなりや旗のはためきの原因でもあり、日常生活でもなじみの深い流体現象である。また、最近では自動車や新幹線からでる騒音などが知られている。カルマン渦列を音以外では確認できないのかと言うとそうでもない。空気は通常透明なため、視覚的には見えないことが多いが、空気が水蒸気を多量に含んだ雲となれば話は別である。下段の図は、ある冬の日に撮影された気象衛星画像であり、雲のカルマン渦列がはっきり確認される。画像上の緑色の線が陸地の海岸線を示しており、右に九州地方が写っている。九州の西の海上、済州島（Cheju-do）の南側には、時計回りと半時計回りの雲渦が左右交互に並んでいるのが分かる。このように済州島の風下にカルマン渦列が見られることは有名である。まさに自然が描いた大スケールの絵画といえるだろう。その他、日本周辺では、屋久島、利尻島の風下に発生しやすく、冬型の気圧配置がやや緩んだ状態がカルマン渦列の発生に適していると言われている。

最後にもう一度、『星月夜』を見ていただきたい。渦列と呼ぶにはあまりにも渦の塊が少ないが、これまで見てきた渦の塊と同じような配置ではないか。ゴッホはこの渦列を本当に空で見たのだろうか。どこか別の場所、たとえば水辺で見たのを絵に描いたのだろうか。あるいは、精神病を患っていたゴッホの目には空に浮かぶ雲が列をなしているように映ったのか。とにかく、ゴッホはこの渦列に何らかの「美」を感じたのではと私は想像する。

（自然科学教育センター・物理学）

閲覧ニュース97号

2005.10発行

北里大学教養図書館

〒228-8555 相模原市北里1-15-1

発行責任者 大林 康二

電話 (042) 778-8005